

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(SCJ)のレシピ: アフガニスタン・バーミヤン州、 民族共存のための 平和教育

アフガニスタンにおける 平和教育事業の背景

多民族国家のアフガニスタンでは、23年間の長い紛争を通じて民族対立が激化した。石仏爆破のあったバーミヤンにも複数の民族が混在し、復興の進みつつある今日でも憎しみや不信の念が根強く残る。そのうえ、多数の難民や国内避難民の帰還と再定住に伴って新たな問題が持ち込まれ、住民同士のいさかいや感情不和もいっそう複雑になろうとしている。

SCJがUNHCRの事業実施パートナーとしてバーミヤンで取り組んだ平和教育事業は、平和を声高に提唱する運動でもなければ教育的アプローチによって平和社会を築こうなどという大それた構想をもつものでもない。農村の現実の暮らしや人々の考え方に焦点を当て、そこに実在している揉め事や争点を緩和するプロセスを通して、対立していた者同士の対話を進めたり第三者が仲介するような機能を村に提案しようという試みであった。

したがって村での活動は、村々の揉め事の原因を村人と一緒に考えることから始めた。異常気象で水不足が続くアフガニスタンでは、農業用水の問題を抱える地域が多かった。例えば川の上流と下流で水利を巡っていさかいが続く村々では、まず農業用水の確保が双方共通の問題であることを確認する。次に偏見や先入観を見つめ直したり、感情を抑えて問題解決にあたるライフスキルを学ぶ研修を両村合同で行った。研修のアウトプットとして地域平和委員会を設立し、村の争いやトラブルを中立する役割を担ってもらった。そして、共通の問題であった農業用水の改善のために、対立関係にあった上流と下流の村が共同でダムや灌漑



2村合同の平和教育ワークショップに参加する女性たち
写真提供:セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

水路を建設する、というような流れになる。

事業における様々な課題

しかし実際には、内戦時代に略奪した側とされた側というような相当に深刻な憎しみを抱えている地域もあり、外部者である我々が関与できるほど生易しい課題ではなからうという懸念は当初からあった。また人材不足のアフガニスタンで、平和教育という特殊な分野をファシリテートする人材を見つけ養成することの難しさもあれば、女性の研修参加者全員が非識字者という郡(女性識字率1%以下)もあり、彼女らの中にある抽象的概念や価値観を言葉というツールに変えて表現し共有することの困難にも直面した。

事業のモニタリングや成果指標も、この種の活動では常に課題となる。さらには、土地の権利書の二重発行(もしくは偽造)や権力者の暴挙など、行政も裁判所も機能していないこの国で、個人や平和委員会が対処できるはずのないと思われる問題も我々の元へ舞い込んでくるようになり、手に余る問題を前に何度も頭を抱えた。

他団体との協力関係による活動

そのような障害を乗り越える助けとなったのは、現地の様々な団体との協



社団法人
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

金谷直子

力関係であった。何よりも他団体との連携とリソースの共有に多大の時間とエネルギーを割き、そこから得るものも非常に多かった。UNHCRのイニシアチブやノウハウは有益な視点を数多く与えてくれたし、Sanaee Development Fundという現地NGOからは平和ワークショップの手法と人材育成において様々な指導を仰げた。バーミヤンで長年村落開発に携わってきた国連人間居住計画にはインフラ建設の部分を担ってもらい、法的な問題についてサポートを求められる機関も現れた。

そういったネットワークのうえにSCJ側が提供できたものは、バーミヤンの地で教育による地域エンパワメントに取り組んできた実績と、スタッフの育成にかけたエネルギーといえようか。平和教育の経験も無から始めて3年かかったが、根気強く人々の声に耳を傾け、真摯に彼らの生活を見つめては、スタッフとともに内省に内省を重ねて自らの姿勢やアプローチを正していく日々であった。平和教育は必ずしも当初からSCJが得意とする分野ではなかったが、そのぶん外部リソースを貪欲に取り入れて咀嚼消化し内面化するプロセスが、単独ではなし得なかったレベルの事業実施へと導いてくれたものと思う。

金谷直子 (かなたに なおこ)

大阪教育大学、英国ブラッドフォード大学院開発事業計画研究所卒。1993年よりセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン勤務。2002年から3年間アフガニスタンに赴任し、現地代表としてバーミヤンを中心とした教育事業に従事。

セーブ・ザ・チルドレン

世界30カ国近くのメンバーが加盟し、子どもの権利の実現のために活動している。最近では紛争地域の子どもの教育を優先課題として取りんでいる。